

シェイクスピアにおける単純形副詞 (Flat Adverb) について

岩本, 弓子

田島, 松二
九州大学言語文化部歴史言語学部門

<https://doi.org/10.15017/6796314>

出版情報 : 言語科学. 29, pp. 29-41, 1994-02-28. 九州大学言語文化部言語研究会
バージョン :
権利関係 :



シェイクスピアにおける単純形副詞

(Flat Adverb) について*

岩本弓子・田島松二

I

現代英語では、副詞といえば形容詞に副詞形成の接尾辞 *-ly* を付けて用いるのが最も一般的である。例えば *large* [形容詞] + *-ly* [接尾辞] = *largely* [副詞] のようにである。しかし初期近代英語期のシェイクスピアには、*-ly* 語尾の付かない所謂 "Flat Adverb" (単純形副詞) と呼ばれる形容詞と全く同形の副詞が、現代英語よりもはるかに頻繁に現われる。¹⁾ 現代英語でも、形容詞や副詞の前に置かれる強意語に限ってみるならば、単純形副詞が用いられることは稀ではない。特にアメリカ英語の口語において、その傾向は強いようである。²⁾ 例えば、"This story is real funny." "I feel awful sorry." のような使い方である。

さて、古英語における副詞形成語尾には *-e* と *-lice* の二通りがあった。³⁾ 元来単純形副詞とはこのうち *-e* 語尾をもつ副詞のことが多い。⁴⁾ 例えば、*heard* + *-e* = *hearde* (*hard*) のようになる。しかし接尾辞 *-e* は中英語期に黙音化し、15 世紀までには発音上も綴り字からも完全に消滅し、形容詞と副詞の区別がつかなくなった。そのため初期近代英語期には、形容詞と全く同形の副詞が出現するようになったのである。この時代は、形容詞と副詞の文法的な区別は後の時代と比べるとそれほど厳密ではなかったようである。しかし、17 世紀頃からの規範文法の発達により *ly* 形こそが正しい副詞であり、単純形副詞は形容詞に過ぎないとした文法家達の考えが大きく影響するようになる。その結果、形容詞と副詞を厳密に区別しようとする傾向が強まり、18 世紀以降は単純形副詞の使用はしだいに減少していったようである。⁵⁾

このようなことからみて、規範文法確立以前のシェイクスピアの英語における単純形副詞の使用状況が、現代の英語とはかなり異なったものであり、同一副詞が単純形でも *ly* 形でも用いられたであろうことは想像に難くない。このような指摘は早くからなされているが、⁶⁾ 詳細かつ実証的な研究は殆ど無いようである。そこで小論ではシェイクスピアの

* 小論は、日本英文学会第46回九州支部大会(1993 年10月23日於福岡女学院短期大学)において発表したものに加筆修正を加えたものである。

作品のなかで、1)単純形副詞がそれに対応する -ly形副詞と比較してどのような頻度で用いられたか、2)どのような統語環境のなかでそれらが用いられたか、という点を中心に単純形副詞の使用状況を明らかにしてみたい。調査したシェイクスピアの作品は、全作品中各時代各分野を網羅する13の作品である。使用テキストは、The Riverside Shakespeare (Boston: Houghton Mifflin, 1974) で、括弧内にそれぞれの略称を記す。

The Tragedy of Romeo and Juliet (ROM)
A Midsummer Night's Dream (MND)
The Merchant of Venice (MV)
The First Part of Henry the Fourth (1H4)
The Second Part of Henry the Fourth (2H4)
The Tragedy of Julius Caesar (JC)
Twelfth Night, or What You Will (TN)
The Tragedy of Hamlet, Prince of Denmark (HAM)
The Tragedy of Othello, the Moor of Venice (OTH)
The Tragedy of King Lear (LR)
The Tragedy of Macbeth (MAC)
The Winter's Tale (WT)
The Tempest (TMP)

II

Oxford English Dictionary (以下OED)を手掛かりにして、シェイクスピアに現われる単純形副詞を、三つのグループに分けることにする。第一のグループは古英語に現われる副詞で、その時代には、-e または -lice という副詞形成語尾をとまって用いられたものである。第二のグループは中英語で副詞として出現するもの、そして、第三のグループは1500年以降に副詞として出現するものである。以下、この三つのグループに分けて論を進めることにする。

A. 古英語に存在する副詞

OED の挙げる初出例が1100年迄、つまり古英語に既に存在していた副詞で、シェイクスピアの13作品中では単純形として使われている副詞は29語あった。先述したように古英語では形容詞からの副詞形成語尾に -e と -lice の二通りがあったが、そこでは -e 語尾のみをもつもの、-lice 語尾のみをもつもの、さらには両方の語尾を並行して持っていた副詞の三通りがある。但し小論では、古英語期からどちらの語尾も持たずに副詞であった far, fain などは含めていない。またシェイクスピアの13作品中、ly 形のみで現われる副詞(例えば bravely, directly, holily, continually 等)も含めていない。

A-1. 古英語において -lice のみを副詞形成語尾に持つ副詞

このグループに属する副詞は、古英語で -lice のみを副詞形成語尾として持つわけであるから、語源的には単純形ではなくly 形のみで用いられるはずであるが以下表1に示すようにシェイクスピアでは単純形も見られる。

表1

単純形		ly 形	
free	2	freely	17
open	2	openly	3
quick	9	quickly	25
slow	5	slowly	2
swift	5	swiftly	3
true	18	truly	30
計	41	計	80

表1から分かるのは古英語の時代に -lice のみを副詞形成語尾としていた副詞は、シェイクスピアでもやはりly 形で用いられることのほうが多いということである。単純形とly 形の用例数は、41例:80例で、1:2の割合であった。しかし個別に見れば、slow, swiftのように単純形の用例数のほうが多いものもあった。以下に例を示す。

Do not then walk too open (TN 3.3.37).

Cf. we so openly Proceed in justice

(WT 3.2.5-6). /

Go quick away (TMP 5.1.305).

Cf. go, and quickly, too (HAM 3.1.139).

A-2. 古英語において -e のみを副詞形成語尾に持つもの

ここに属する副詞はもともと -e を形容詞の語尾に付けて副詞としたものであり、後になってその -e が消滅したために形容詞と同形になったのであるから語源的には純然たる単純形副詞である。しかし表2に示すようにシェイクスピアのなかには逆にly 形も並行して現われる。

表2

単純形		ly 形	
fair	18	fairly	11
friendly	1	friendlily	0
hard	13	hardly	9
long	28	longly	0

表2に示す副詞は元々、-lice 語尾を持たない副詞なので、シェイクスピアでも単純形で用いられる頻度が圧倒的に多く、単純形とly 形の割合は7:2であった。しかしly 形でも用いられており、特にfairly とhardly の頻度が目立つ。hardとhardlyの間では意味の分化が生じつつあるためであろう。⁷⁾しかし、fairlyに関しては、そのような事実がないのに二つの形が併用されている。下に代表例を示す。

Devised a new commission, wrote it fair

loud	11	loudly	1
thick	1	thickly	0
wide	5	widely	0
計	77	計	21

(HAM 5.2.32). Cf. You gave us the counterfeit fairly (ROM 2.4.45)/
Who knocks so hard (ROM 3.3.78).
Cf. you shall hardly offend her
(2H4 2.4.116).

A-3. 古英語に於て -e と -lice の両方を副詞形成語尾に持つもの

ここに属す副詞は表3に示すように16語で最も多い。語によって、副詞形成語尾に -e と -lice の何れを取るかということが、はっきりと定まっていない副詞が多数あったということであろう。シェイクスピアでは以下の頻度であった。

表3

単純形		ly形	
bitter	1	bitterly	2
bright	1	brightly	1
clean	3	cleanly	0
dear	9	dearly	12
deep	8	deeply	7
even	1	evenly	1
full ⁸⁾	11	fully	1
heavy	1	heavily	1
high	5	highly	3
late	21	lately	7
light	1	lightly	1
new	17	newly	11
right	13	rightly	9
sore	4	sorely	3
strong	3	strongly	8
yare	3	yarely	1

表3に挙げた副詞は元々 -e と -lice の両方の語尾をとらうるので、deep, high, sore のようにシェイクスピアでも単純形とly形がほぼ同数使用されているものがある。しかし、full, late では単純形がly形より圧倒的に多く用いられており、new, right も単純形の方がかなり頻度が高い。一方 dear, strong のように、ly形の頻度数の方がかなり高い副詞もある。個々の副詞により使用状況は異なるが全体的には単純形とly形の頻度は102:68で単純形で用いられる割合が約二倍多かった。次にその例を示す。

The moone shines bright (MV 5.1.1).

Cf. A substitute shines brightly as a King
(MV 5.1.94). /

Of these our dear-belov'd solemnized
(TMP 5.1.310).⁹⁾

Cf. We dearly grieve (HAM 4.3.41).

古英語全体で見た場合、シェイクスピアでは単純形とly形の用例数は220例:169例であり、単純形のほうが約1.4倍頻度が高かった。

計	102	計	68
---	-----	---	----

B. 中英語で初めて現われる単純形副詞

OED の中で、1100 ～1499年の中英語期に単純形の初出例が出てくる副詞で、シェイクスピアのなかで使われているものは表4に示す36語であった。これらの副詞に関しては、OEDに加えて Middle English Dictionary (MED)をも参考にした。

表4

単純形		ly 形	
bare	1	barely	1
certain	6	certainly	8
close	14	closely	2
double	2	doubly	1
doubtless	1	doubtlessly	0
easy	5	easily	7
excellent	12	excellently	3
false	6	falsely	5
feat	1	featly	2
firm	1	firmly	1
fierce	1	fiercely	0
hollow	1	hollowly	1
horrible	3	horribly	2
incontinent	1	incontinently	1
indifferent	1	indifferently	2
jocund	1	jocundly	0
loose	1	loosely	2
low	10	lowly	1
marvellous	8	marvellously	0
meek	1	meekly	0

古英語由来の副詞の単純形が徐々に -e を消滅させた形で用いられたことにもなって、中英語期に主としてラテン系の言語から入ってきた借用語も最初から形容詞と同形で副詞として用いたものが多かったのではないかと考えられる。それら借用語を含む、中英語初出の副詞を見てみると、全体的にはシェイクスピアの単純形副詞は、対応する ly 形副詞にたいして167:76の使用数であり、ほぼ二倍の頻度数で用いられている。しかし個々の副詞を見てみると、straight, marvellous, passing などは単純形のみで用いられており、また close, excellent, low, scarce, sure は、単純形のほうが圧倒的に優勢である。逆に、ly 形のほうが使用頻度が高いものもあり、特に plain, safe がそうである。さらに certain, easy, feat, loose, round, sad, terrible も、ly 形の使用数が単純形の使用数を上回っている。下に用例の幾つかを示す。

In every point twice done and then
done double (MAC 1.6.15).

Cf. In both my eyes he doubly sees
himself (MV 5.1.244)./

odd	1	oddly	0	Of <u>excellent</u> dumb discourse
outright	1	outrightly	0	(TMP 3.3.39).
passing	9	passingly	0	Cf. it is <u>excellently</u> well penned
plain	1	plainly	7	(TN 1.5.173). /
pure	1	purely	0	I can <u>scarce</u> speak to thee
rash	1	rashly	1	(LR 2.4.136).
reasonable	1	reasonably	1	Cf. which <u>scarcely</u> keeps thee warm
round	1	roundly	3	(LR 2.4.270). /
sad	1	sadly	4	murders have been performed Too
safe	1	safely	9	<u>terrible</u> for the ear (MAC 3.4.77).
scarce	17	scarcely	6	Cf. You should do it too <u>terribly</u>
secure	1	securely	0	(MND 1.2.74).
seeming	2	seemingly	0	
straight	36	straightly	0	
sure	12	surely	3	
terrible	1	terribly	2	
計	167	計	76	

C. 1500 年以降に現われる単純形副詞

ここに属す単純形副詞は表 5 に示す 32 語あった。これらの副詞はシェイクスピアとほぼ同時代に現われたものである。表のなかで、*で示したものはシェイクスピアが単純形の初出例として OED に記載されている副詞である。また、#で示した語は OED には単純形としての用法が一例も載っていないが、今回の調査でシェイクスピアの 13 作品中に、単純形副詞としての用法が新たに見出されたものである。さらに + で示した語は、OED の挙げる単純形副詞用法の初出例がいずれもシェイクスピアの作品以降のものである。そして、無印はシェイクスピア以外の、同時代の作品が OED に単純形副詞の初出例として記載されている語である。

表 5

単純形	ly 形

1500 年以降現われた単純形副詞のシェイクスピアでの使用状況を全体的に見てみると、単純形:ly 形が 54:58 でほぼ同数である。この点は古英語、中英語に現われた副詞の、シ

apt	1	aptly	1
current	1	currently	0
*damnable	1	damnable	1
#dareful	1	darefully	0
devilish	1	devilishly	0
#dishonourable	1	dishonourably	0
exceeding	9	exceedingly	4
faint	1	faintly	4
flat	1	flatly	3
flattering	1	flatteringly	0
foolish	1	foolishly	1
furious	1	furiously	0
*gallant	1	gallantly	1
#general	2	generally	2
*gentle	2	gently	12
*grievous	1	grievously	2
honest	1	honestly	0
*honourable	1	honourably	1
*instant	1	instantly	0
level	2	levelly	0
#liberal	1	liberally	0
*monstrous	2	monstrously	0
#natural	1	naturally	1
+neat	1	neatly	0
part	2	partly	10
*precious	1	preciously	1
quiet	1	quietly	1
+strange	3	strangely	12
#valiant	1	valiantly	0
*villainous	2	villainously	1
#wanton	1	wantonly	0
wondrous	7	wondrously	0
計	54	計	58

ェイクスピアにおける使用状況とは大きく異なる。歴史的に見た場合、古い副詞は、ly 形より単純形で用いられる頻度の方がかなり高いが、1500年以降新しく使われるようになったものほど -ly を付けて、副詞としての機能をはっきりさせていくようになる傾向が見て取れる。

先ず表5で*で示したものは、OEDでの初出例がシェイクスピアから引用されているものであるが、damnable, gallant, gentle, grievous, honourable, instant, monstrous, precious, villainous の9語である。次に幾つか例を示そう。

A lover, that kills himself
most gallant for love
(MND 1.2.23).

Cf. His cuisses on his thighs,
gallantly arm'd
(1H4 4.2.105)/

Young man, thou couldst not
die more honourable
(JC 5.1.60).

Cf. Most like a soldier,
order'd honourably (JC 5.5.79)

次に、表5中#で示した語は、OEDには単純形副詞としての用法が、一例も載っていない語で、dareful, dishonourable, general, liberal, natural, valiant, wanton の7語である。(念のため MED にも当たってみたが、単純形副詞の用法は全く記載されていない。)

下記に示すのはそれらすべての用例である。

We might have met them dareful, beard to beard (MAC 5.5.6). /
 ten times more dishonourable ragged than an old faced ancient
 (1H4 4.2.31). / Should go so general current through the world
 (1H4 4.1.5). / He only, in a general honest thought (JC 5.5.71). /
 No, I will speak as liberal as the north (OT 5.2.220). / but I do it
 more natural (TN 2.3.83). / Do call it valiant fury (MAC 5.2.14). /
 Pinch wanton on your cheek (HAM 3.4.183).

上に示した例は、動詞を修飾するものもあれば、形容詞を修飾するものもある。その修飾するものがどちらであれ、明らかに形容詞ではない。OED ではこれら7つの語の単純形副詞の用法を一例も記載していないが、少なくともシェイクスピアには単純形副詞の用法が厳に存在するという事実は指摘しておいてよいであろう。

次に+で示した *neat*, *strange* の2語であるが、OED の挙げる単純形副詞用法の初出例はいずれもシェイクスピアの作品以降のもので、*neat* は1665年、*strange* は1667年が初出例である。ところが以下に示すように、既にシェイクスピアにおいても、*neat* は The First Part of Henry IV (1596-7年)、*strange* は Hamlet (1600-1年) に単純形副詞の用法があり、OED の年代より約半世紀はさかのぼることができることが分かる。以下にそれらの例を示す。

Came there a certain lord, neat, and trimly dress'd (1H4 1.3.33). /
 How strange or odd soe'er I bear myself (HAM 1.5.170).
 Cf. Things have been strangely borne (MAC 3.6.3).

表5のなかで、無印の14語は、シェイクスピア以外の、同時代の作品が、OED に単純形副詞の初出例として、記載されている語である。apt, current, devilish, exceeding, faint, flat, flattering, foolish, furious, honest, level, part, quiet, wondrous, であり、一番早い語が *part* の1513年、一番遅い語が *devilish* の1612年である。シェイクスピアでは以下のような例が見出された。

You grow exceeding strange (MV 1.1.67). Cf. I have been to-night
exceedingly well cudgelled (OT 2.3.365). / And, part, being prompted by
 your present trouble (TN 3.4.343). Cf. I but believe it partly
 (JC 5.1.90). / so you will let me quiet go (MND 3.2.314).
 Cf. Where in we saw thee quietly inurn'd (HAM 1.4.49).

以上をまとめてみると、古英語で現われる副詞で、シェイクスピアで単純形副詞として使用されているものは29語であった。単純形と *ly* 形との使用頻度数は 220:169 であった。また中英語に初出する副詞でシェイクスピアに単純形副詞として使われる語は36語で単純形:*ly* 形の使用頻度167:76、1500 年以降現われる単純形副詞は32語で、単純形:*ly* 形

は54:58であった。初出年代が古い単純形副詞ほど、種類は少なくとも使用頻度が高いことが分かる。また1500年以降現われる単純形副詞は対応する 1y 形副詞との使用頻度がほぼ同じである。これは、それ以前に現われた副詞と大きく異なる点で、出現年代が新しくなるほど、同じ副詞を用いる場合には、単純形よりも 1y 形を用いる傾向が強くなっているように思われる。

III

次に単純形副詞が使われる統語環境を考えてみたい。まず、(1)動詞を修飾する場合、(2)形容詞や副詞を修飾する場合、(3)文全体を修飾する場合、の三つに大別される。以下にそれぞれの例を挙げる。

1. 単純形副詞が動詞を修飾する例

The moone shines bright (MV 5.1.1). Cf. A substitute shines brightly as a King Untill a King be by (MV 5.1.94)./ Inform her full of my particular fear (LR 1.4.337). Cf. it will stuff his suspicion more fully (LR 3.5.22)./ I expose myself pure for his love (TN 5.1.86).

下の例のように単純形と 1y 形が同一箇所に使われている例もあった。

he sought my life. But lately, very late (LR 3.4.168)./
fall to't, yarely, or we run ourselves aground...cheerly, cheerly,
my hearts! yare! yare! (TMP 1.1.4-6)

また次の例のような受け身形で、単純形副詞が過去分詞を修飾する場合もある。

Warm and new kill'd (ROM 5.3.197). Cf. And Juliet bleeding, warm, and newly dead (ROM 5.3.175)./ I am too sore enpierced with his shaft (ROM 1.4.19). Cf. The heart is sorely charged (MAC 5.1.54).

2. 単純形が形容詞や副詞を修飾する例。

a monstrous little voice (MND 1.2.52)./ That did but show thee, of a fool, inconstant And damnable ingrateful (WT 3.2.187)./ he is grievous sick (1H4 4.1.16)./ With foreheads villanous low (TMP 4.1.249)./ the blessed sun himself a fair hot wench (1H4 1.2.9)./ full bravely hast thou flesh'd (1H4 5.4.130)./ You shall do marvellous wisely (HAM 2.1.3).

このように単純形副詞が形容詞または副詞を修飾する場合は、強意語 (intensifier) の機能を果たす場合が殆どであることが分かる。

3. 文修飾語として使われる例

文修飾語として使用される単純形副詞は *certain* と *sure* の二語のみである。

This beauteous lady Thisby is certain (MND 5.1.131). Cf. but he was certainly whipped out of the court (WT 4.3.89). / he sure means brevity in breath (2H4 2.2.124). Cf. he pays you as surely as your feet hit the ground (TN 3.4.277).

以上三つの統語環境における単純形副詞の用例数を、それに対応する *ly* 形の用例数と比較して年代別に分けてまとめてみると下の表6ようになる。尚、(動) は動詞修飾、(形) は形容詞または副詞修飾、(文) は文修飾の副詞の用例数である。

表6

	単純形			ly形		
	動	形	文	動	形	文
古英語	214	26		152	6	
中英語	129	37	18	70	6	11
1500年以降	23	31		49	5	
計	366	94	18	271	17	11

上の表から分かることは、先ず年代別に見た場合、中英語や古英語に初出する副詞で、シェイクスピアで単純形副詞として使用されているものは、動詞修飾に用いられる頻度が形容詞修飾と比べて遥かに高いことである。とはいえ、形容詞修飾として使用される *ly* 形副詞が5例か6例ほどしか見出されないのに比べると、単純形副詞の形容詞修飾の用例は中英語由来の語が37例、古英語由来の語が26例といった具合に、*ly* 形よりもはるかに多い。このような単純形副詞は、意味的には強意語である場合が多く、中英語に初出する語でシェイクスピアで見られたものに、*passing*, *indifferent*, *excellent*, *horrible*, *marvellous* 等があり、古英語由来では *full*, *right*, *sore* があった。最も顕著な特徴は1500年以降に現われる単純形副詞で、それらは動詞修飾に使われることが比較的少なく、形容詞修飾31例のほうが、動詞修飾23例を上回っている。この点は、中英語期までに現わ

れて、シェイクスピアで単純形として使用されている副詞の使用状況とは、大きく異なる点である。意味的には1500年以降の単純形副詞も、修飾する形容詞や副詞の強意語として使用される例が多い。例えば、damnable, grievous, monstrous, villanous, exceeding, wondrousといった単純形副詞である。一方、1500年以降初出の1y形を見ると、動詞修飾：形容詞修飾は49:5で、圧倒的に動詞修飾が多い。これは、新しく副詞として使われるようになった語ほど、動詞修飾には1y形のみを使用し、単純形は、形容詞修飾に限定する、というように使用環境をはっきりと分けて用いるようになる傾向を示しているのではないだろうか。単純形副詞の現われる統語環境を見ると、上記以外に、さらに付け加えておかなければならない点がある。それは、二語以上の副詞が同一の動詞を修飾する場合そのなかの一語にのみ1y語尾を付け、残りは単純形を使うという特徴である。例えば、以下のような例が6例見出された。

And I, most jocund, apt and willingly, To do you rest, a thousand deaths would die (TN 5.1.132-3). / And here the smug and silver Trent shall run In a new channel, fair and evenly (1H4 3.1.102).

上の例は一番最後の副詞のみが1y形となっているが、以下の一例だけは最初に来る副詞のみが1y形となっている。

Speak so startingly and rash? (OT 3.4. 79)

このような環境でも、単純形副詞は生じやすいといえる。

IV

以上、シェイクスピアにおける単純形副詞の使用状況をそれに対応する1y形副詞と比較しながら見てきた。現代英語の観点から見ると、シェイクスピアの作品では単純形と1y形はかなり混同して用いられている。特に dareful, dishonourable, general, liberal, natural, valiant, wantonの7語は、OEDには全く単純形の用例が記録されていないが、シェイクスピアのなかで単純形副詞として用いられていることが新たに分かった。初出例の年代別に見ると、中英語期までに初出の副詞は、全体的に見ると、単純形のほうが、1y形で用いられるよりも頻度が高いが、1500年以降に初出する単純形副詞は、1y形とほぼ同じ頻度数である。しかもそれらは、動詞修飾よりも形容詞や副詞修飾の強意語としての頻度が高い点が中英語期までに現われた単純形副詞と異なる点である。最初に述べたように、初期近代英語あたりを起源とするアメリカ英語の口語体に、この用法の単純形副詞が珍しくないことは、この時代の単純形副詞の用法の名残りではないだろうか。現代英語における単純形副詞は形容詞或は副詞の強意語としての用法にのみ残り、それ以外は、1y形に統一する方向にますます向かっているように思われる。

注

- 1) Cf. Abott (1870, pp.17-8); 荒木他 (1984, p.489); Franz (1939⁴, 齊藤他訳 [1958] pp.346-57).
- 2) この点については、尾上 (1952, pp.54-74) に詳しい分析がある。
- 3) Cf. Franz (1939⁴ [1958] pp.346-7), Mustanoja (1960, p.314), etc. 尚、lice 自体も元々は形容詞形成語尾 -lic にさらに副詞形成語尾 -e が付いたものである。
- 4) OED の flat adverb の定義は "Not distinguished by a characteristic endings as an adverb which has the same form as an adjective... Flat adverbs of modern English often go back to an Old English form ending in -e." となっている。
- 5) Cf. 荒木他 (1984 pp.493-4).
- 6) Cf. Abbott (1870³, pp.17-8), Franz (1939⁴, § 241-5), etc.
- 7) OED で hardly が hard にはない否定の意味をもつのは1535年の例が最初である。シェイクスピアでは以下に示す例のように、hard と hardly が両方用いられるのは "with difficulty" を意味する場合のみである。

I did full hard forbear him (OT 1.2.10). Cf. Profit again should hardly draw me here (MAC 5.3.62).

hardly がこの意味なのは他に二例あり、それ以外は hard と hardly が同義で用いられている例はない。

- 8) full は -lice 語尾を取るが、-e 語尾は取らず、厳密には形容詞 full の対格形 full が古英語期から副詞として用いられていた。
- 9) 小論では副詞と考えられるハイフン付きの用例も含めた。以下のような例である。

And new-create this fault? (OT 4.1.276)

new は、17 例中13例がハイフン付きであった。ハイフン付きの例は全部で35例あり、そのうち下の例以外は全て単純形であった。

but strangely-visited people (MAC 4.3.150).

REFERENCES

Abott, E.A. (1879³). A Shakespearian Grammar. Rept., New York: Haskell House 1972.

- 荒木一雄・中尾祐治(1980). 『シェイクスピアの発音と文法』荒竹出版.
- 荒木一雄・宇賀治正朋(1984). 『英語史』(英語学大系)10 大修館.
- Evans, G.B. (ed.) (1974). The Riverside Shakespeare. Boston: Houghton Mifflin.
- Franz, W. (1939⁴). Die Sprache Shakespeares in Vers und Prosa. Halle: Niemeyer.
 (齊藤静他訳『シェークスピアの英語－詩と散文』篠崎書林(1958).
 ———. (1892-95). "Zur Syntax des alteren Neuenglisch"
Englische Studien. (宮部菊男他訳『初期近代英語の研究』南雲堂(1991).
- 市河三喜・嶺卓二注釈『詳注シェイクスピア叢書』3,4,5,8,12,14,16,17,18,19,20.
 研究社.
- Kurath, Hans, S.M.Kuhn, and R.E.Lewis (eds.) (1952-). Middle English Dictionary
 Ann Arbor, Mich.: Univ. of Michigan Press.
- Murray, J.A. et al. (eds.). (1989²). The Oxford English Dictionary. Oxford:
 Clarendon.
- Mustanoja, T.F. (1960). A Middle English Syntax. Helsinki: Societe
 Neophilologique.
- Onions, C.T. (1986). A Shakespeare Glossary. rev. by R.D. Eagleson. Oxford:
 Clarendon.
- 尾上政次 (1952). 『アメリカ語法の研究』研究社.